

審査の結果の要旨

氏名 巽 由 樹 子

本論文の目的は、絵入り雑誌というメディアの内容の分析を通して、従来研究が手薄であった近代ロシアにおける都市中間層の実相を、文化的観点から解明することである。ロシアの都市中間層を本格的に分析することが、これまでまれであった理由の一つには、彼らをロシア近代史にどのように位置付けるのか、また彼らに適切な分析方法とは何か、という難問が、未開拓のまま残されてきたからである。筆者は、こうした問題に立ち向かうべく、都市社会の中核部分を成す都市中間層の消費文化に着目する。

この消費文化とは、個々の抽象的な文化事象ではない。それを、本論文は、都市中間層全体に通底する彼らの価値観や生活態度であること、現代世界に支配的なものと同質であること、と積極的に評価している点が、斬新であり重要である。そうした消費文化に対応していたのが、しばしば「軽い読物」と呼ばれ、通俗的であると軽視されていた新興の絵入り雑誌だった。それが西欧に由来し、商業主義の論理が貫かれていたことを明らかにすることで、ロシアの従来のメディアとの差違を際立たせるのに成功している。このような比較の視点は、本論全体を貫いており、本論文の議論に立体感を持たせている。

第2章は、公共図書館が当時公刊したが、これまでほとんど利用されてこなかった統計資料や、ロシアの文書館の史資料に基づいて、読者の地理的分布、読者の身分構成などを分析することによって、都市中間層の着実な拡大や、絵入り雑誌の急速な普及などを、実証している。本論文でとりわけ堅実な部分であり、高く評価できるところでもある。

それに対して第3章は、「絵入り雑誌」の記事内容の分析であり、「既成の体制秩序とは異なる、都市の消費文化を反映した新しいアイデンティティ」など、都市中間層に通底する消費文化の論理の読みとり方は、鮮やかである。第4章では更に、絵入り雑誌において、ロマノフ朝最末期の3人のツァーリの表象が取り扱われる様式を、ロシアの文書館の資料を用いて分析し、そこから都市中間層の中に、筆者が「有名人のプロマイド化」と呼ぶ、ロシア国家社会の統合核ともいえるツァーリの新しい表象が出現したことを、読みとっている。これは、近年研究が盛んなツァーリ表象分析への重要な貢献である。ここにはまた、帝政の転覆へと至る一つの仮説的な展望も示唆されている。

このように本論文は、従来関係づけられてこなかった多方面の文献の整理検討の上に独自の方法意識を構築し、それに基づいて、公刊、未公刊の史資料を渉猟分析し、斬新な近代ロシア史像のための確かな礎をおいた、帝政期ロシア史研究上の重要な貢献として評価できる。たしかに、対象の新しさの故に、概説風な叙述に流れるところもあり、今後さらに研究調査に取り組むべき課題も少なからず残されているとはいえ、それらは本論文全体の学術上の価値を大きく損なうほどのものではないと判断される。

以上により、本審査委員会は、本論文を博士（文学）の学位を授与するにふさわしい優れた業績として認めるものである。